

# 重複障害児と係わり手の相互的活動における注意の共有についての事例からの考察

阿部 恵美

## 問題と目的

Bruner (1983) は通常の言語発達において、言語獲得の前に「ことばの前のことば」があり、そこで重要なものは、共同活動であり、共同注意であると述べている。この共同注意に関する研究は視覚的共同注意に焦点化されてきた経緯がある。重度・重複障害児の対人的相互交渉の成立について考察した徳永(2003)が、共同注意は視覚以外のモダリティでも成立しているはずだと指摘したように共同注意現象について視覚以外の行動も広く分析対象としてあつかうべきである。また、重複障害児の共同注意を視覚的共同注意に限定して考えるのはその障害状況から困難である。則松(2004)は「注意の共有」という現象の中に、「両者の注意が同一のモノへ向かったとき(いわゆる三項関係)に加えて、「両者の注意が互いに向かい合ったとき(見つめ合いや声のかけ合い)」「(二項関係)もとりあげている。本研究においても広義に「注意の共有」をとらえ、重複障害児と係わり手の相互的活動における注意の共有現象を視覚以外のモダリティも含めて明らかにすることと注意の共有現象が生じた前後の状況について明らかにすることを研究の目的とする。

## 方法

### 1 事例対象児

肢体不自由養護学校小学部2年(訪問学級)に在籍する重複障害児Aである。

### 2 手続き

資料収集の期間はAの生活年齢7歳10ヶ月時から年齢8歳2ヶ月までに実施した計8回のセッションであり、場所はA大学障害児教育実践センターである。資料収集の対象である靴を脱ぐ活動は、1足目の靴を脱ぐ活動の提案・誘いかけ、活動の合図 実行、活動を行ったこととモノ(脱いだ靴)の確認、脱いだ靴を箱に入れる活動の提案と実行、確認の展開で行われ、2足目も同じ展開

で実施された。活動における係わりとしてJOYFUL SHARED EVENT(土谷, 2004)の枠組みのもとで子どもが係わり手に向けて何かを表してくれるとき、その意味やイメージを共有したり、そこからやりとりを通して、活動をいっしょに作っていくことを方針とした。また、その係わりを相互的活動と定義した。係わりについては表出確認を丁寧に行うことも方針の一とした。

### 3 資料収集の方法と分析の視点

デジタルビデオカメラにより得られた資料をプロトコル記述及び行動カテゴリーによってデータ化した。プロトコル記述から[活動の提案・誘いかけ],[活動の合図 実行],[活動を行ったこととモノ(脱いだ靴)の確認]場面の係わり手の働きかけに対して5秒以内に動きの見られたAの身体部位を再データ化し、また、人への注意に関するエピソード、人モノ人への注意に関するエピソード、注意の共有に関するエピソード、活動の見通しに関するエピソード、表出確認に関するエピソードに分類した。

行動カテゴリー表からは、Aの視線・顔の向きと係わり手の視線の一致とAの身体的行動と係わり手の働きかけの連関データを抽出した。

## 結果

1 係わり手の働きかけとAの身体表出行動の変化  
係わり手の働きかけに対し5秒以内に動きの見られたAの身体部位の結果は表1に示した。セッション1~3までは口、首、目の3部位に動きが見られた。セッション4では同じく3部位であったが足の動きが見られた。セッション5では手、セッション6では腰の動きがそれぞれ加わった。このようにセッションを追う毎に動きの見られた身体部位が広がった。また、セッション毎に中心的に動きの見られる身体部位は同じではなかった。場面別に見た場合、[活動の合図 実行]場面での身体部位の動きが多かった。

表1 靴を脱ぐ活動の[提案・誘いかけ]・[合図 実行]・[確認]場面の係わり手の働きかけに対して5秒以内に動きの見られたAの身体部位

靴を脱ぐ活動セッション		1		2		3		4		5			6			7			8					
Aの動きの見られた身体部位		口	首	目	口	首	目	口	首	目	足	口	首	目	足	手	腰	口	首	目	足	手	腰	
[提案・誘いかけ] 「靴脱ぎましょう」 (一緒にしませんか)	1足目	+			+			+																
	2足目	+	+		+	+		+	+			+	+	+	+	+					+	+	+	+
[合図 実行] 「せえの、よいしょ」 (一緒にしよう)	1足目	+	+		+	+		+	+			+	+	+	+	+					+	+	+	+
	2足目	+	+		+	+		+	+			+	+	+	+	+					+	+	+	+
[確認] 「靴脱いだね」 (一緒にしたね)	1足目	+	+		+	+		+	+			+	+	+	+	+					+	+	+	+
	2足目	+	+		+	+		+	+			+	+	+	+	+					+	+	+	+

注:「+」は動きが見られたことを示す。実線の囲み円は全項目において動きがみられた場合、破線の囲み円は5項目において動きがみられた場合を示す。

## 2 エピソード分類から

### 1) 人への注意に関して

Aの視線による注意が係わり手に向いた29のエピソードを注意が向くきっかけとなったAの感覚入力情報ごとに分類しベン図に表した。感覚別では聴覚情報、触覚情報、視覚情報の順に多く、重複した感覚別では、聴覚+触覚情報、聴覚+視覚情報、視覚+触覚情報の順に多かった。

### 2) 人モノ人への注意に関して

セッション4からAが人モノ人へ注意を移動させる行動表出が見られるようになった。いずれも微細な動きではあるが連続静止画によりAの視線及び首の動きをとらえた。

### 3) 注意の共有に関して

[合図 実行]場面において係わり手の働きかけに対して動きの見られたAの身体部位と動きについてエピソードを整理した結果、係わり手の働きかけに対する1足目よりも2足目の表出行動がわずかながら多かった。係わり手の合図の働きかけに対しAの足の動きが初めて見られたエピソードはセッション2の2足目であった。セッション6以降、腰の動きが見られるようになった。動きの見られた身体部位はセッション1から4までは2~4部位であったがセッション5以降は5~6部位まで拡大した。セッション1の2足目では係わり手の合図「せえの」の「せ」の時に口の動きが見られたが、セッション5以降は「せえので、よいしょ」の直後に足や腰が動くなど、係わり手の音声言語による合図に対して動きの見られた身体部位の拡がり及び身体部位の動きが表出するタイミングに変化が見られた。

### 4) 活動の見通しに関して

活動の終わりにAに見られた動きとして靴の入った靴箱を笑顔で見る、脱いだ靴に係わり手のガ

イドで触り、大きく息を吸う、靴箱が下がると、首を大きく動かして息を吐くなどがセッション3までに見られた。セッション4以降は活動の前もしくは始まり時に係わり手を見る、係わり手の提案に対して口や首、手を動かす、息を吸う、吐く、笑顔になるなどの動きが見られた。これらは活動の見通しに関するエピソードとして抽出した。

### 5) 表出確認に関して

係わり手の表出確認に対して口、首、手などの身体部位及び係わり手を見る動きが見られた。セッション5,7では表出確認に対しての連続したAの身体表出が見られた。

### 3 Aの視線・顔の向きと係わり手の視線の一致

Aが係わり手に視線・顔を向けていた平均は19.7%、モノへは45.3%、その他へは38.7%であった。Aと係わり手の視線及び顔の向きの対照クロスの変化は図1の通りである。[合計]は二項関係を含んだ視覚的な注意の共有を示すが、ほぼ40%以上の一致であった。セッション4を除くといずれもYがXよりも多かった。両者がお互いを向いている時間の割合よりもモノへ向かう時間の割合が多かった。

### 4 Aの身体的行動と係わり手の働きかけの連関

活動開始から60秒の間におけるAの身体的行動及び係わり手の働きかけの全セッションにおける同期の割合は図2に示した。セッションを通じてAの身体的行動と係わり手の働きかけが同期した割合は60%弱であった。係わり手の働きかけを分類した場合のAの身体的行動との同期の割合が高かった順は係わり手の身体接触、言語行動、モノの動きであった。

## 考察

子どもの身体表出を秒単位というミクロの視点で分析的に見た結果、日常的な係わりの中では

係わり手が見逃してしまうような微細な動きを子どもが表出しているということが明らかになった。

係わり手の働きかけとAの身体表出行動の変化の結果から、係わり手の働きかけに対し、微弱ながらも頻りに動く身体部位があること、かつ、それは毎回同じ部位とは限らなかったことはその日の状況においてより動かしやすい身体部位があることを示し、係わり手は子どもの動きそうな身体部位を固定的にとらえるだけではなく複眼的に注意を注ぐことが望まれると言える。

Aと係わり手との視覚的な注意の共有はほぼ40%以上であった。視覚的な注意の共有の結果が低いセッションの場合は係わり手の働きかけに対して5秒以内に動きの見られた身体部位の結果においても活動の展開に共通して動いた身体部位が少ない結果と一致していた。係わり手の働きかけに対する身体部位の動きを注意の共有現象ととらえ、視線・顔の向き的一致を視覚的な注意の共有現象ととらえると、Aの注意のレベルが下がっている場合はどちらにも影響をもたらす場合があると考えられた。

靴を脱ぐ活動において視線による子どもの注意が係わり手に向ききっかけとなった情報は聴覚情報、触覚情報、視覚情報の順であった。これは

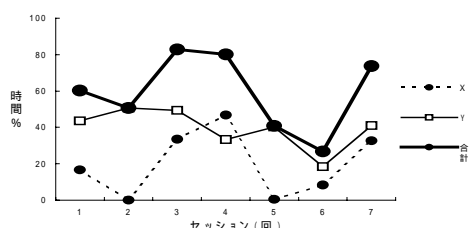


図1 Aの視線・顔の向きと係わり手の視線の対照クロスの変化

注) X: Aの視線・顔の向きが係わり手に向き、係わり手の視線がAに向いている時間%を示す。Y: Aの視線・顔の向きがモノに向き、係わり手の視線がモノに向いている時間%を示す。合計はXとYを合わせた時間%を示す。各セッション時間を100としてそれぞれの時間%として示した。

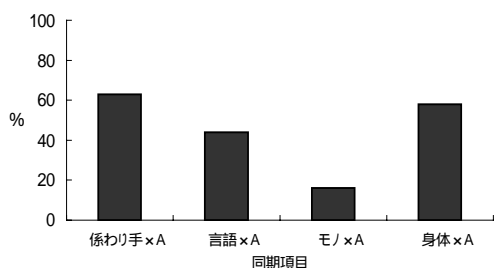


図2 係わり手の働きかけとAの身体的行動の同期の割合

注: 全セッション480秒中における総同期数の%

Aが視覚障害を併せ持つために視覚以外の感覚器官を多く活用して情報を入手していたと考えられる。ここから係わり手は子どもの障害状況の把握に十分努め、提供する情報の検討の重要性が示唆された。

靴を脱ぐ活動の[合図 実行]場面において係わり手の働きかけに対して見られた動きは視覚以外のモダリティの注意の共有現象と考えられる。動きの見られた身体部位はセッションを追うごとに拡大し、動きの表出のタイミングの変化も見られるようになったがこれは子どもが係わり手と共に靴を脱ぐ活動に全身的に取り組もうという志向性の表れと解釈できる。

活動の見通しに関しては、活動の終わりがわかるということが活動の開始 展開 終始の一連の過程がイメージされることにつながると考えられる。これは相互的活動において係わり手とのイメージの共有につながると言える。イメージの共有が、活動の共有にもたらす影響があると考えられるならば、注意の共有についても影響があると考えられる。係わり手の表出確認に対し、Aの身体表出が見られ、それに対して係わり手が再度表出確認をするという会話のようなやりとりが見られた。表出確認に対する動きは注意の共有と考えられ、やりとりへの発展とは、場や時間、活動、情動などの共有と相まって子どもと係わり手の間で共有が确实さを増していく過程でもあったと考えられた。文献

Bruner, J.S. 寺田晃・本郷一夫(共訳)(1988) 乳幼児の話したことば - コミュニケーションの学習 - . 新曜社 .

(Bruner, J.S. 1983 *Child's talk: Learning to use language*. NY :Oxford University Press.)

則松宏子(2004) 共同注意と文化的文脈 . 大藪泰・田中みどり・伊藤英夫(編著) 共同注意の発達と臨床 . 川島書店 . Pp.299-336.

徳永豊(2003) 重度・重複障害児のコミュニケーション行動における共同注意の実証的研究, 平成11~平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(2)), 国立特殊教育総合研究所 .

土谷良巳(2004) JOYFUL SHARED EVENT, 生きる力を育むコミュニケーション, 川崎市立大戸小学校研究紀要, 7.